

放送&エンタメ

娯楽

笑いのない
人生なんて

「らしさ」全開の古典落語で人気

笑福亭喬介

出陣子「幸せなら手をたたこう」が流れると、客席から手拍子が起こる。ファン的心を捉えるのは、笑福亭喬介「写真」の落語に登場する愛すべきキャラクターたち。入門12年目の今年、「らしさ」全開の古典落語で新人賞に輝くなど、波に乗る。大学で落研に所属。卒業後、笑福亭三番の門をたたいた。入門はすんなりかかったが、その後の修業は厳しかった。つけられたあだ名が「上方落語界のアホぼん」。今でこそ自らネタにしているが



自分なりの工夫 磨き上げ

「気が利かん」と怒られ続け、3年で破門の危機は「体感では7回ぐらいですかね……」。落語の指導は、もっと厳しかった。まだ「商品」ではないと、「3年間は絶対外で落語させへんから、って言われました」。他の一門の後輩が、落語会にくつも出演するのを横目に「言葉の意味から人物の感情、伝え方でみっちり教わった。入門から5年が過ぎた頃。「このサゲ(噺)のオチ、今の人には伝わらへんやろ。お前、変えへんか?」当時覚えていた噺について、三番からこう声をかけられたのをきっかけに、教わった通り演じていた古典落語に、自分なりの工夫を加えるようになった。

登場人物がどう考

え、どう振る舞い、どう言うか。一つ一つ噺に思いをめぐらせ、人物を形作っていく。セリフを変えたり、ギャグを足したりは考えれば誰でもできる。僕は人間を変えたい」。新人賞にも輝いた自信作「牛ほめ」は、底抜けに明るい主人公の「絶対してないけど、いてそうなアホぶり」が傑作だ。すっかり「喬介版」になった「牛ほめ」を師匠の前座で演じたことがある。「俺が教えたのと同じぶん変わってるな」。舞台袖ですれ違いざま、そうつぶやいた三番の目は怒っていないかった。

自分だけの面白さを見つけ、磨く日々。「すべてについて正解はない。常に変化していく。そこが面白い」

【山田夢留、写真も】